



あとは血となれ肉となれ

「塾は、明日何時から開いているの？」と聞きながら、毎日、時には午前中から来て大学受験の追い込み勉強をしている高3の女子生徒が「受験が終わったらベルゲンにある本を片っ端から読み尽くしたい！」とつぶやいていました。本を読んではいけない時だから、つい読みたくなるのかもしれませんが。

ところで、ブックディレクターという仕事をご存知でしょうか。本の演出家とでもいうのでしょうか。例えば「六本木ヒルズ TSUTAYA」などのブックセレクトを手掛けているのは幅允孝（はば・よしとか）さんという方です。彼は自分が書いた本の中でこう言っています。「少なくとも僕にとっては、本を読むこと自体が目的ではない。その読書が、どう自らの日々作用し、いかにおもしろおかしく毎日をごせるかの方が重要だと思っている。本を読んでも亡くなった人が生き返ったり、借金がゼロになったりすることは（残念ながら）ない。だから、厳密に言えば、本は誰も救ってはくれないのかもしれない。」たしかに極端な宣伝文句のハウツーものや実用書以外は、具体的な効果を期待して読むわけではないでしょう。本を読むことによってワクワクしたり、ハラハラしたり、しみりしたりすること。あるいは新たな視点を発見したり、知的好奇心を刺激されたりすること。そんなことを味わいたくて読む場合がほとんどでしょう。しかし、幅さんはこうも言っています。「けれど覚えていて欲しいのは、本の遅効性だ。本を読むことによって備わる、自分の中の引き出しのようなもの。その中にある小さな経験は、厳しい現実から自分がなんとか持ちこたえるための耐性を授けてくれる。読んだ本の数よりも、読書にあてた時間よりも、読んだものがどう自身の中へ血肉化するかの方が大切だと思える。」そうなんです。ゆっくり効いてくる漢方薬のように、健やかな体を育ててくれるスローフードのように読書は私たちを支えてくれます。

知り合いの塾長がこんなことを言っていました。「受験のための国語とそうでない国語があるわけではありません」さあ手元に本を！